

データ連携基盤サブワーキンググループの検討状況 について

平成30年1月25日(木)

内閣府
政策統括官(科学技術・イノベーション担当)



データ連携基盤サブワーキンググループ(第1回)議事次第

平成30年1月23日(火)16時00分～18時00分
於:中央合同庁舎8号館6階 623会議室

議題

1. データ連携基盤サブワーキンググループ運営規則について
2. データ連携基盤サブワーキンググループの進め方について
3. データ連携基盤整備の現状と課題について(事務局)
4. データ連携基盤に関する官民の取組みについて
 - 4-1 データ連携基盤の取組(IT総合戦略室)
 - 4-2 一般社団法人データ流通推進協議会のご紹介(データ流通推進協議会)
 - 4-3 欧州における官民データ連携プラットフォームの取り組みから参考にすべき施策(NEC)

出席者

合計86名:構成員、傍聴者(一般、府省庁関係者)、事務局

(五十音順)

座長	氏名	所属・役職	SIP
	安達 淳	国立情報学研究所 教授/副所長	インフラ
	石川 洋一	国立研究開発法人 海洋研究開発機構 地球情報基盤センター統合地球情報研究開発部 統融合情報研究開発グループ グループリーダー	海洋
	井上 陽介	一般社団法人 社会基盤情報流通推進協議会 G空間情報センター 副センター長 / 企画開発担当	
	臼田 裕一郎	国立研究開発法人 防災科学技術研究所 総合防災情報センター センター長	防災・減災
◎	江崎 浩	東京大学大学院 情報理工学系研究科 教授	
	甲斐 隆嗣	株式会社日立製作所 社会イノベーション事業推進本部 事業戦略推進本部 公共企画本部 本部長	
	出村 雅彦	国立研究開発法人 物質・材料研究機構 統合型材料開発・情報基盤部門 (MaDIS) 副部門長	構造材料
	寺澤 和幸	日本電気株式会社 未来都市づくり推進本部 シニアエキスパート	
	寺島 一男	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 理事 (推進担当)	農業
	花谷 昌弘	株式会社NTTデータ オープンイノベーション事業創発室 部長	
	松塚 貴英	株式会社富士通研究所 ソフトウェア研究所プロジェクトディレクター	
	三徳 昭弘	ダイナミックマップ基盤株式会社 取締役	自動走行
	三輪 康史	株式会社日本総研 創発戦略センター シニアスペシャリスト	

○Society5.0は全ての産業の生産性を横断的かつ飛躍的に向上。これを実現するためには、現在分散しているデータを連携してビッグデータ化して扱うことが急務。こうした「ビッグデータ」にアクセスするためのデータ連携基盤(例:日本版NIEM※)を整備。

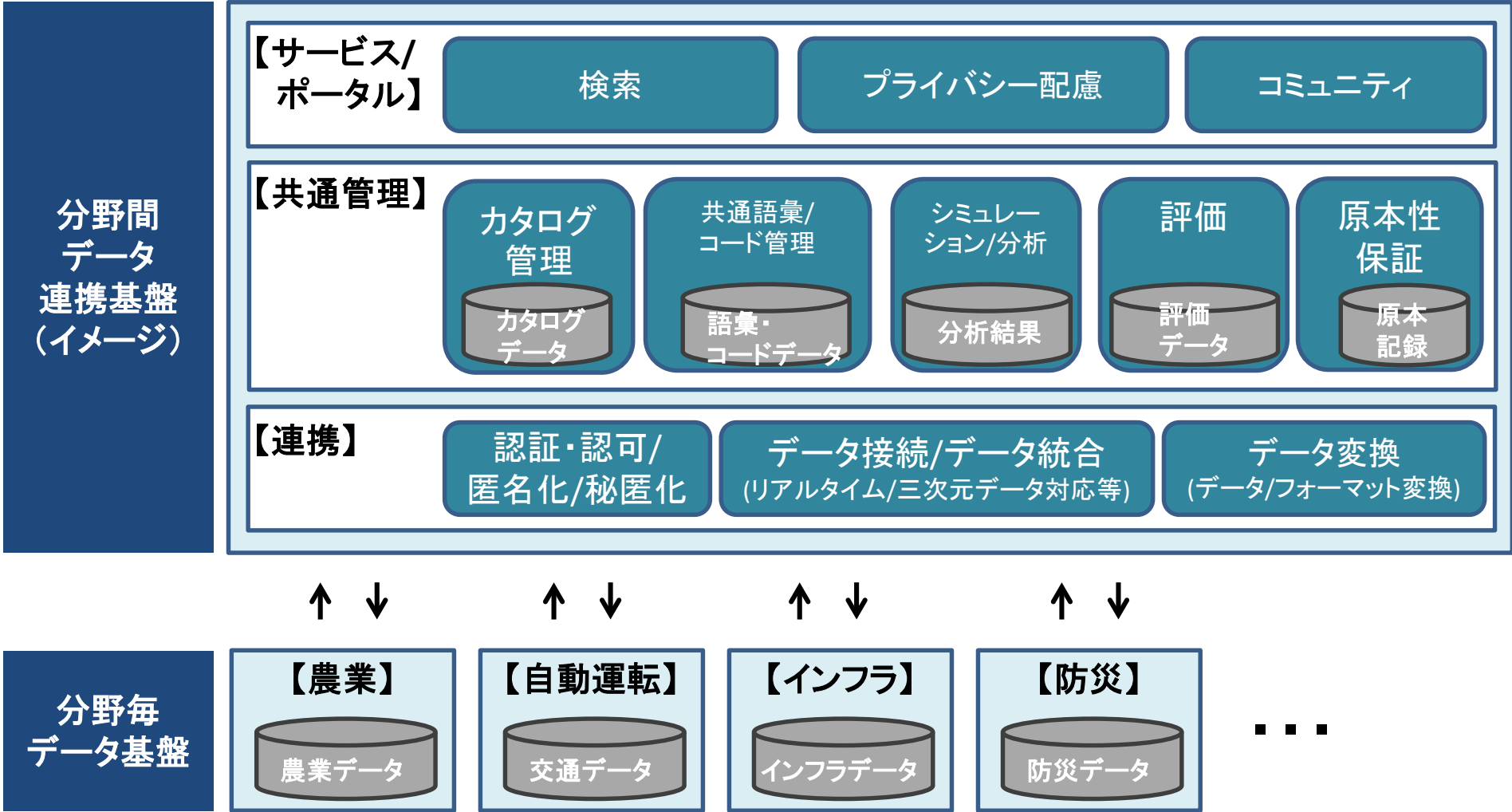
○農業、ものづくり、自動運転、インフラ、防災・減災、スマートシティ等の主要分野でデータ連携基盤・基盤技術を構築すべく、SIP/PRISMで各省庁施策を糾合。2020年までに全国に展開できる基盤を整備。2019年G20でSociety5.0を世界に発信。

※National Information Exchange Model



ものづくり等で豊富な
フィジカル空間の情報を持つ日本の強み
フィジカル空間

※既にCSTIを司令塔として各省連携(SIP)で進めている農業、自動運転、インフラ、防災・減災分野のデータベース整備を他の分野へ拡大。SIP、PRISMの枠組を活用。



#	区分	機能	機能概要
1	サービス/ポータル		利用者がデータを利用し易くサポートする機能
2		検索/データ統合	あいまいなキーワードにて検索し、複数分野のデータを時空等で統合。 IoTデータへの対応が必須
3		プライバシー配慮	プライバシーにも配慮し、オプトイン・オプトアウト・データ利用目的の追加等の利用者・提供者とのやり取りを実装
4		コミュニティ	利用者同士の意見交換・イノベーション協創(共同研究等)の場
5	共通管理		データ検索や連携のためにデータ連携基盤が管理する機能
6		カタログ管理	カタログデータ(名称、作成者など)を登録、更新
7		共通語彙/コード管理	データ変換にて共通項目名等に揃えるための語彙/コード情報を登録、保管
8		シミュレーション/分析	分野共通のシミュレーションや相関等分析(EBPM向け相関分析含む)
9		法人・データ評価	法人・データの品質・実績等をランク付け。認証と連携しアクセスを制御
10		原本性保証	各分野で発生するデータの原本性を保証。データ流通品質を担保
11	連携		データ利用者の要求に応じて、データ提供者のデータを応答する機能
12		認証・認可/匿名化/秘匿化	提供者、利用者の認証、データ匿名化、暗号化等
13		データ接続	データ提供者、利用者との接続を行う機能。(センサデータ等のリアルタイム接続、三次元データ接続も含む)
14		データ変換	データの単位、座標系、項目名等及びデータフォーマットを揃える機能

区分	主な課題
分野間データ連携基盤に関する議論	<ul style="list-style-type: none">➤ <u>G7 や G20 を意識しながら、かつ、特にデータ連携という観点からは、北米、欧州と日本という3極間での整合性・調整も重要な要素であるので、この点も十分に考慮すべき。</u>➤ <u>各分野の分野間連携のメリットを外部に向けて発信する必要がある。効果が見えやすい分野間連携の姿を想定して、象徴的案件として先行的に進めてはどうか。</u>➤ <u>例えば、SIP防災・減災では、実際の災害時に具体的に何ができるのかを関係者に示すことで、協力が得られやすくなった。</u>➤ <u>ウォーターフォール型の開発ではなく、分野間・分野毎と同時に開発を進め、PDCAを回しながらより良いものにしていくことが大切。</u>➤ <u>分野毎の基盤を通さずとも、分野間連携基盤に直接データを提供できるような仕組みも必要。</u>➤ <u>データ提供者にデータを出してもらうには、データの価値に応じた対価が必要。そのため、データ品質を正しく評価し、その品質を保証することが重要。</u>

区分	主な課題
分野間データ連携基盤に関する議論	<ul style="list-style-type: none">➤ データフォーマット、語彙、API等の「標準化」と、「相互運用性」は別である。「相互運用性」が優先であり、既存のデータを扱う上では、語彙、フォーマットを変換するという方法もある。そうしつつも、新しいデータなどを<u>徐々に標準化</u>にもっていければ良い。➤ データ流通推進協議会として、特に、どんなデータが、どこにあり、その仕様がわかるようにするための「<u>データカタログ</u>」と、どんなセンサーで取られたデータか、イレギュラーなデータが含まれないかなどを示す「<u>データ品質</u>」を重要と考えている。本サブWGと連携して具体化したい。➤ <u>欧州では官民で、FIWAREというプラットフォームを、分野間データ連携の仕組みとしてオープンソースで構築し、欧州中心に110都市に普及拡大している。すべてゼロから開発する必要はなく、この技術資産を活用し、日本独自部分を追加して日本版のデータ利活用基盤にしてはどうか。</u>

区分	主な課題
データ利活用に関する制度・ルール面の議論	<ul style="list-style-type: none">➤ <u>機微なデータの取り扱い</u>に対して、<u>誰がアクセスできるか、誰がそれを判断するのか、評価や手順、ポリシーを明確にする必要がある。</u>➤ 公的データを積極的に基盤にのせることで、利用者が広がる。<u>公共調達や公的資金による研究開発の成果として、1次データを公開するルールづくり</u>をしてはどうか。➤ <u>データを提供するインセンティブ</u>や、提供したデータの1次利用、2次利用等に対する<u>責任問題の整理</u>が必要。
今後のサブWGの運営について、	<ul style="list-style-type: none">➤ 分野毎のデータ基盤を立ち上げるにあたり、同じような課題を抱えているものとする。各基盤の<u>ベストプラクティス</u>や、<u>データカタログ整備のロードマップ化</u>など、<u>情報共有するため、サブWGが終了した後も継続的な議論ができる場</u>を設けられないか。